

濟州島 4・3 紀行

ー現場探訪によって 4・3 事件を考えるー (上)

倉 持 和 雄

目 次

はじめに

- 1 濟州島 4・3 事件とは
- 2 濟州島 4・3 紀行の旅程
- 3 濟州島 4・3 事件の起点 = 3・1 節発砲事件の現場 : 觀徳亭
- 4 4・28 平和会談の現場 : 九億里国民学校跡地
- 5 失われた村 : 東広里ムドンイワ、細花里タランシ、禾北里コヌル洞

以上、本号掲載

- (1) 東広里ムドンイワ
- (2) 細花里タランシ
- (3) 禾北里コヌル洞

- 6 最大の虐殺事件 : 朝天邑北村里ノブンスンイ
- 7 右翼団体西北青年会による虐殺 : 城山浦トジンモク
- 8 朝鮮戦争時の予備検束による虐殺 : ソダルオルムと百祖一孫之地、濟州飛行場

おわりに

はじめに

本学では海外フィールドワーク (以下、海外 FW と略す) というプログラムが数年前に開始された。授業の一貫で学生たちを海外に連れて行き、現場で学ぶ機会を与え、これに大学が一定の支援をするというもの

である。わたしは現代韓国朝鮮社会という講義を担当していて、授業ではできる限り、写真や動画など映像を利用して臨場感を再現できるように努力しているが、所詮、限界がある。もし学生たちを韓国に連れて行って、その現場で学習できたら、どんなにか効果的だろうかと思っていた。そんなとき本学でこのプログラムが開始され、これぞ僥倖と応募して過去3回実施してきた¹。

今回の海外FWで取り上げたテーマは「済州島4・3事件」である。済州島4・3事件については、昨年の海外FWで「韓国の民主化運動」を取り上げた時に、できればカバーしたい歴史的イベントであった。しかし、限られた日程で済州島まで足を伸ばすことは難しくして諦めた。そういうことがあったので、今年度は「済州島4・3事件」を独立したテーマとして取り上げたが、ある意味で昨年度との連続性があるとも言える。といっても「済州島4・3事件」は、昨年度、「韓国の民主化運動」として取り上げた釜馬民主抗争（1979年）²、光州民衆抗争（1980年）³、6月民主抗争

¹ 第1回は、2010年9月10日～9月18日にかけてソウルを拠点に、植民地期の日韓関係に関わる歴史的現場（西大門刑務所跡、旧朝鮮総督府跡・閔妃殺害現場としての景福宮、朝鮮神宮跡地としての南山公園、三一運動発祥地としてのタブコル公園、三一運動時の虐殺事件現場としての堤岩里）および南北分断に関わる現場（仁川上陸作戦現場としての月尾島、板門店会議場と南侵第三トンネル）などを訪問した。第2回は、2011年9月10日～9月17日にかけて、韓国の民主化運動の歴史をテーマとして、釜山・馬山、光州、ソウルの三都市を回り、民主化運動の記念施設と歴史的現場を訪問した。またソウルの民主化運動記念事業会で曹喜暎聖公大学教授から「韓国の民主化運動の歴史的意義」についてレクチャーを受けた。以上、2回の海外フィールドワークについては、学生たちの事前調査資料と報告文を掲載した報告書を作成した。

² 釜馬抗争とは、1979年10月16日から20日にかけて釜山と馬山で起こった学生・市民による「維新撤廃」、「独裁打倒」を叫んだ大規模な民主抗争である。この抗争自体は、釜山全域に戒厳令が布かれ、軍隊によって鎮圧されたが、この対応をめぐる朴政権内部の対立から金載圭中央情報部長が朴正熙大統領を射殺するという事件を引き起こした。1972年10月にはじまった強権的・独裁的な維新体制を崩壊に至らしめた重要な契機になったと評価されている。

³ 光州民衆抗争とは、1980年5月18日～5月27日の期間、光州で学生に無差別的な暴力的弾圧を加える空挺部隊など軍に対して光州市民が立ち上がった民主抗争である。朴正熙の突然の死によって維新体制が崩壊し、韓国社会では民主化の気運が高ま

(1987年)⁴とは事情を異にしている。

現在の韓国において、上記三つは、こんにち、すべて「抗争」と呼ばれ、民主化運動として、その歴史的性格が認定されている。そう認定されたのも韓国で民主化が実現したからにほかならない。「済州島4・3事件」も、その真相究明は韓国の民主化以後、可能になった。しかし、「済州島4・3事件」は、他の3つの民主化運動のように、民主化運動と規定するまでに国民的合意は得られないでいる。それだけ「済州島4・3事件」が複雑な性格をもっているからである⁵。

「済州島4・3事件」を「抗争」と呼ぶ立場の人もないわけではないが、一般には、いまだに「事件」と呼ばれている。最近、「済州島4・3事件」

り、1980年の新学期以降、全国の大学で学生による民主化を求めるデモが繰り広げられた。しかし、全斗煥をリーダーとする新軍部は、1979年12月12日のいわゆる12・12クーデターで軍内部の主導権をすでに掌握していた。1980年5月17日24時を期して全国に戒厳令を布告して、光州に空挺部隊を派遣して学生たちを無差別的に連行した。空挺部隊の余りの暴力的な鎮圧を目の当たりにした光州の市民は、これに対して大衆的な抗議行動を開始した。しかし、空挺部隊はデモの群衆に発砲して多数の犠牲者を出すに至る。ついに光州市民は武装して反撃し、一時、軍を市街に追い出し、市内は解放区の様相を呈した。しかし、態勢を整えた軍によって最終的に武装鎮圧された。光州民衆抗争後に、全斗煥政権が成立して強権的な統治を継続することで1980年の民主化運動はいったん挫折した。しかし、この抗争の集団的な記憶が1980年代後半の学生運動の高揚を支え、6月民主抗争の成功に結びついた。

⁴ 6月民主抗争とは、1987年6月の一連の「独裁打倒」、「護憲撤廃(=大統領直接選挙実現)」の大衆的な民主化運動のことを言う。全斗煥政権は現行の間接選挙制を維持して彼の後継者である盧泰愚に政権を移譲しようとした。これに対して、大統領直接選挙の実現という点で一致した民主化運動は大衆的な支持を得てソウルはじめ全国の諸都市で街を埋め尽くすようなデモが繰り広げられた。その背景には拷問致死事件など人権抑圧を繰り返す全斗煥政権への嫌悪感が蔓延していたこと、この間の経済発展で多数の中間層が成長し、彼らが民主化運動に加担したことが挙げられる。結局、政権側が大統領直接選挙制への改憲を受け入れることで民主化運動は勝利した。大統領選挙では民主化陣営の候補者一本化が実現しなかったため盧泰愚が次期大統領に当選したが、その後の韓国における民主化定着の出発点となった。

⁵ 済州平和公園にある平和記念館の展示館へと最初のところに「白碑」という何も刻んでいない石碑が置いてある。これは済州島4・3事件の性格が未だに定まっていないことを象徴する展示物だとの説明があった。

の真相究明をしてきた人々を中心に、「事件」という語をはずして「済州島4・3」、「済州4・3」あるいは、ただ「4・3」とする呼称が見られる。これは、こうすることで、光州民衆抗争を「光州5・18」あるいは「5・18」と呼ぶのと同様に、「抗争」としての性格付けを含意したものと思われる。本稿は、標題で「済州島4・3」としたが、本文では通常の出例に従って「済州島4・3事件」あるいはたんに「4・3事件」と一応呼んでいくことにする。なお標題に「紀行」という言葉を使った。悲劇的な事件現場を踏査するというのに、果たして適切な用語であるか、少しとまどったが、韓国で「4・3紀行」とは、4・3事件を深く理解するための現場学習という意味として用いられている。それに倣って、ここであえて使用することにした。

本稿はこの済州島4・3事件の現場探訪記ではあるが、単なる紀行文ではない。訪ねた現場についての具体的事例を示しながら、4・3事件の真相を探り、済州島4・3事件の意義や問題点を議論していくことが目的である。

1 済州島4・3事件とは

済州島4・3事件とは何かについては、本稿全体を通じて明らかにする課題であるが、まずは以下のような説明から入っていくことにしよう。

韓国で済州島4・3事件の真相が語られ、明らかになっていくのは比較的最近のことである。長い間、人々がその真相を語ることに、いや済州島4・3事件に触れることさえ、タブー視されていた⁶。何故か？ それは、この事件に触れ、その真相を暴くことが大韓民国の存立を揺るがすこと

⁶ 済州島出身の玄基榮氏は、済州島4・3事件のなかで最大の虐殺事件であった北村事件を題材にして『順伊おばさん』という小説を1978年に発表した。このことで彼は情報機関に拘束され過酷な拷問を受けた（文京洙（2008）、183ページ、許榮善（2006）、16ページ）。また、訪問地の一つであり、後に本文で言及するが、1956年に建立された百祖一孫之地の4・3事件犠牲者の慰霊碑は、1961年軍事クーデター後の朴正熙軍事政権下で粉々に破壊されてしまった。

になりかねないと、時の政権が危惧したからだと考えられる。真相究明が可能になったのは、1987年6月民主抗争の結果、韓国が民主化されたことが契機となっている。しかし、すぐに真相究明が進んだわけではなかった。それが進展していくのは、犠牲者遺族や地元新聞社などメディア、濟州島の研究者たちの地道な真相究明の調査活動と政府に対する犠牲者名誉回復の運動、そして金大中・盧武鉉という進歩派政府の登場が相俟ったからである。その結果、ついに金大中政権時代の2000年1月、「濟州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復に関する特別法」（以下、4・3特別法）が制定され、この法にもとづいて、濟州島4・3事件の真相究明は政府事業として行われることになった⁷。事件後、実に50年以上もの歳月を経てのことであった。

さて、この4・3特別法では、4・3事件を以下のように定義している。

「濟州4・3事件」とは、1947年3月1日を起点として1948年4月3日に発生した騒擾事態および1954年9月21日までに濟州島において発生した武力衝突と鎮圧過程で住民が犠牲となった事件をいう⁸。

しかし、この定義を読んで、この事件がいったいどんな事件なのか理解することができるであろうか。4・3特別法の定義は次のような特徴がある。

第一に、濟州島4・3事件の期間を明示している。すなわち、1947年3月1日から1954年9月21日（約7年7ヶ月）の期間の事件だとしている。事件の場所が、「濟州島において」ということは自明なことだから、4・3特別法では、事件の期間と場所は明確にしているといえる。

しかし、第二に、この法では、「住民が犠牲になった事件」だとするが、

⁷ 濟州島4・3事件の真相究明と4・3特別法成立の歴史的経緯については、前掲、文京洙（2008）の第IV第四節以下、また韓国語文献であるが、金昌厚（2011）を参照されたい。

⁸ 濟州島四・三事件を考える会・東京編（2010）、73ページ。

その事件の主体や性格については歯切れが悪い。「4・3」と呼ばれるのは、武装隊⁹が武装蜂起を1948年4月3日に起こしたことに由来するが、これを騒擾事態と呼び、その主体の武装隊については指摘がない。住民の犠牲は、武力衝突と鎮圧過程で生じたとされるが、武力衝突や鎮圧に関わった主体についても明示していない。

このように4・3特別法で言う4・3事件は、事件の場所と期間は明示しているが、「住民が犠牲となった」原因については、騒擾事態、武力衝突、鎮圧過程と表現するが、その主体や性格については言及しないままにして出発したのである。

この住民の犠牲者については、4・3特別法の第3条に規定された「済州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会」（以下、4・3委員会）が審査・決定することになっている。ところで4・3委員会が犠牲者を認定するに当たって、以下の基準に該当する者は、犠牲者の認定から除外している。すなわち、①済州島4・3事件の勃発に直接的な責任がある南労党済州島党の核心幹部、②軍・警察の鎮圧に主導的・積極的に対抗した武装隊首魁級など、である¹⁰。つまり4・3特別法および4・3委員会においては、武装蜂起を主導した南労党、武装隊の中心的メンバーは、殺害されていても犠牲者としては認めないという立場を取っているのである。このことはすなわち、彼らの武装蜂起は、光州民衆抗争などと同様の抗争とは認められないということである。4・3蜂起の主導者は、依然として「暴徒」であり、彼らの引き起こした武装蜂起は「暴動」であるという、従来の見方を引き継いでいるともいえる。

一方、鎮圧過程で主体となった警察、右翼団体、軍隊など討伐隊のメンバーは、無辜の住民の加害者であっても、その責任は不問に付された

⁹ 「武装隊」という呼称も立場によっては「遊撃隊」と呼ぶ人もいる。また済州島で武装隊が山にこもって活動したので「山の人」というような言い方がよくされている。しかし本稿ではもっとも一般的に使われている「武装隊」で通すことにする。

¹⁰ 前掲、済州島四・三事件を考える会・東京編（2010）、88ページ。

ままであり、彼らが犠牲になった場合にはすべて犠牲者として認定されている。

しかし、その後、犠牲者の認定過程で犠牲者の実態が明らかになった。犠牲類型と加害者別犠牲者数の実態を見ると第 1 表のようになっている。

第 1 表 4・3 事件の犠牲者類型と加害者別犠牲者数による実態

		人数 (人)	割合 (%)
犠牲類型	死亡者	9,989	73.6
	行方不明者	3,429	25.3
	後遺障害者	146	1.1
	計	13,564	100.0
加害者別	討伐隊	11,450	84.4
	武装隊	1,673	12.3
	その他	441	3.3
	計	13,564	100.0

出所: 濟州島四・三事件を考える会編『濟州島四・三事件 記憶と真実』(新幹社、2010年)
注: 4・3委員会による2000～2007年の審査の結果の数字である。

この数字は、あくまでも4・3委員会による2007年までの認定者数である¹¹。把握できていない犠牲者まで勘案すると、4・3事件の犠牲者総数は2万5千人～3万人になると4・3委員会は推定している¹²。しかし、認定された犠牲者は、犠牲者全体の様相をある程度は反映していると考えられる。

まず犠牲類型を見ると後遺障害者として生存している犠牲者はごくわ

¹¹ その後、2011年の審査を加えると認定された犠牲者総数は、14,033人である(濟州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会ウェブサイト <http://www.jeju43.go.kr/sub/catalog.php?CatNo=30>より)。しかし、ここでは、加害者別など詳細が示されていないため2007年までの数値を利用した。

¹² 濟州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会 (2003)、537ページ。

ずかでしかない。行方不明者というのは、遺族が遺体を確認できないために行方不明者として分類しているのもあって、すでに死亡した犠牲者にはかならない。つまり、死亡した犠牲者のうち4分の1が遺体を確認できていないということである。そのこと自体もこの事件がきわめて異例であったことを物語っている。

そのことは、ひとまず措くとして、加害者別の犠牲者数をさらに見ていくと、84%は討伐隊によって犠牲になったということである。もちろん武装隊による犠牲も12%あり、この事実を無視することはできないが、犠牲者の数だけで論ずるならば、4・3事件は、犠牲者の圧倒的多数が、討伐隊である警察、右翼団体、軍隊によって殺害された事件であったと言えるだろう。のちに本論で言及するが、武装隊と討伐隊の間では、冷酷な報復合戦があった。討伐隊員が一人、殺害されただけで、その現場周辺の住民が多数、犠牲となるのが、4・3事件の期間、繰り返された。逆に、武装隊の犠牲に対して、ある村が武装隊の襲撃対象となり、村の住民に多数の犠牲を出すということもあった。ただ、第1表をもとに言えば、武装隊による1人の殺害に対して討伐隊は7人を殺害したという勘定になる。

以上、犠牲者の実態を見ただけで、4・3事件の性格がある程度、見えてくるのだが、4・3特別法の4・3事件の定義では、その性格に、あえて立ち入らないままにして出発したのである。

しかし、4・3特別法にもとづく真相究明の結果、討伐隊による犠牲者の中に多数の無辜の住民が含まれている事実が明らかにされていく。その結果、韓国政府は、4・3事件において「国家権力の過ち」があったことを認めるに至るのである。2003年10月、4・3委員会による調査報告を受けて、当時の盧武鉉大統領は以下のように謝罪の意を表明した。

私は委員会の建議を受け入れ、国政の責任をあずかる大統領として、過去の国家権力の過ちに対し、遺族と済州道民のみならず、心からのお詫びと慰労の言葉を申し上げます。罪なく犠牲

となった英霊を追悼し、謹んで冥福を祈ります¹³。

そして、4・3委員会による調査の結果、4・3特別法において曖昧であった4・3事件の定義も、その報告書では、次のように定義し直された。

濟州4・3事件は、「1947年3月1日、警察の発砲事件を起点として、警察・西青の弾圧に対する抵抗と単選・単政反対を掲げて、1948年4月3日、南労党濟州島党の武装隊が武装蜂起して以来、1954年9月21日、漢拏山禁足地域が全面開放されるときまで濟州島で発生した武装隊と討伐隊間の武力衝突と討伐隊の鎮圧過程で数多くの住民が犠牲となった事件」と定義することができる¹⁴。

この定義は、4・3特別法の定義と比べると、事件の主体とその内容・性格を明確にしていると評価できる。

ところで、特別法においても、調査報告書においても4・3事件の定義で、時期を武装蜂起が起こった1948年4月3日からではなく、それよりほぼ一年さかのぼる1947年3月1日を起点としている点の意義も重要である。4・3事件を武装隊による武装蜂起によって始まるとするのではなく、蜂起の原因となる背景をも理解しようとする姿勢を示している。4・3事件が何であるかは、武装蜂起の背景としての前史にまでさかのぼって理解しなければならないという立場をとっているのである。

濟州島4・3事件とは何かについて、4・3特別法の定義を手掛かりにして検討してきた。この節の最後に、これまで述べたことに、多少、コメントを付け加えたかたちでまとめとしておこう。

第一に、4・3事件の時期についてである。日本の植民地支配から解放された朝鮮半島は38度線を境に米ソにより占領され、統一国家の樹立を

¹³ 前掲、濟州島4・3事件を考える会・東京編 (2010)、78ページ。

¹⁴ 前掲、濟州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会 (2003)、536ページ。なお、この定義に出てくる「西青」とは正式には、西北青年会といい、北朝鮮を逃れてきた青年たちによって構成された反共主義団体のことである。西青についてより詳しくは、のちに本文で言及する。

めざしつつも、南北分断に向かって進んでおり、独立国家のあり方をめぐって社会的葛藤のまっただなかにあった。米ソの合意で提案された信託統治案（米ソ英中の4ヶ国による5年間の信託統治を経て独立政府を樹立するという案）については、これに賛成する左翼勢力と、即独立を主張して反対する保守勢力が対立した。そのような状況のなか濟州島で左翼勢力が一方的に弾圧される契機となる1947年3月1日の3・1節発砲事件が発生した。これを4・3事件の起点としているのである。

その後、南朝鮮は米軍政の後押しで、南だけの単独政府樹立の方向に傾いていくが、これを歓迎する保守派の李承晩勢力とこれに反対する左翼勢力がさらに激しく対立していった。4・3事件の背景として、大韓民国樹立推進勢力とこれに抵抗する左翼勢力の対立という構図があることを理解しておく必要があるだろう。

その後、結局は南に大韓民国（韓国）、北に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の二つの国家が樹立されてしまう。この対立し合う二つの国家は、それぞれが自らこそ唯一の正統な朝鮮半島を代表する国家であると主張する。しかし、二つの国家が存在するかぎり、自らの正統性を真に実現し得ない矛盾を抱えることになった。北朝鮮はこの矛盾を武力統一によって解決しようと朝鮮戦争を引き起こした。しかし、結局、朝鮮戦争は南北の境界線をほんの少し変更（戦争前の38度線から戦争後の休戦ライン）しただけで、分断国家の矛盾を解決することはできなかった。濟州島は朝鮮戦争で戦場とはならなかった。しかし、朝鮮戦争の開始は、島内における共産主義への警戒と敵愾心を煽り、4・3事件の関連者に大きな影響が及んだ。

4・3事件は、このように韓国における解放後の韓国樹立をめぐる対立と混乱を背景としている。朝鮮戦争が終結（休戦という形ではあるが）して約一年、やっと平穏な状況になり、それまで濟州島では武装隊根拠地の中山間地帯への出入りを制限していたが、これを解禁した。1954年9月21日のことである。4・3事件はこれをもって終息したと理解されて

いるのである。なお最後の武装隊員呉元植が捕らえられたのは1957年4月のことであった¹⁵。

第二に、4・3事件の性格についてである。長い間、共産主義者である武装隊による共産暴動とされていたが、犠牲者の実態を見ると、犠牲者の8割以上は討伐隊によって殺害され、しかもその多くは、無辜の住民であった。しかし、長期にわたる反共政権のもとで討伐隊に殺害された犠牲者がその真相を語ることは許されなかった。やっと韓国で民主化が実現することで、4・3事件の真相究明が可能になったのである。さらに韓国政府が4・3事件における国家権力の過ちを認め、犠牲となった住民の名誉回復が実現するのはつい最近のことなのである。しかし、最初のところでも述べたが、4・3事件の性格について国民的合意は未だに得られていないのである。

第三に、これと関係して、4・3武装蜂起自体は、韓国の他の民主化運動のように「抗争」としては認められていない。また国家の過ちとして大統領が謝罪はしたが、加害者としての討伐隊の責任については不問に付されたままなのである。

以上、濟州島4・3事件の概要的な説明を踏まえて今回の海外FWで訪問した場所について語りながら、4・3事件についてさらに理解を深めていきたいと思う。

2 濟州島4・3紀行の旅程

さて本論に入る前に今回の海外FWの旅程を示しておこう。濟州島4・3事件をテーマとすることを決めて、海外FWプログラムを申請する前に、4・3事件について何冊かの本を読み、こんな場所を見て回ろうと計画書を作成した。その申請は認められたが、さて計画した訪問地をどんな経路で回ればよいか、あるいは実際に回れるのか、濟州島の地理事情に疎かったので、いささか不安になった。そこで、濟州島4・3事件の

¹⁵ 文京洙 (2008)、148ページ。

研究では日本における第一人者である立命館大学国際関係学部の文京洙教授に助言を求めることにした¹⁶。以前から研究業績を交換する間ではあったが、とくに親交があったわけではなかった。しかし文京洙教授はわたしの依頼に快く応えてくださった。そのおかげで今回の海外FWは、非常に有意義で、充実したものになったのである¹⁷。

この計画を立てていた時に、4・3事件の真相究明で重要な役割を果たした済州4・3研究所に協力をお願いしようと思っていた。ところが、文教授に依頼した過程で、文教授が4・3研究所の現所長の金昌厚氏と懇意であることが分かった。早速に文教授を通じて金昌厚所長を紹介していただき、金所長と直接、連絡を取り合えることができた。今回の旅程は、私の当初の計画をもとにしながらも金昌厚所長と連絡を取り合いながら、金所長がアレンジし直してくれたものである。

さて前置きが長くなったが、今回の海外FW の実際の訪問地とその場所について簡単な説明を示したのが第2表である。また本文で言及していく4・3事件の訪問場所を第1図の地図上および第2表に★で示した。★の後の数字は本文で言及していく順番を示している。

¹⁶ 文京洙氏の多数の著作のなかで、文京洙(2008)が済州島4・3事件そのものを取り上げているが、このほか文京洙(2005a)、文京洙(2005b)でも済州島4・3事件への言及が重要な部分を占めている。この他にも論文や翻訳などにおいても済州島4・3事件に関する論考が多数ある。

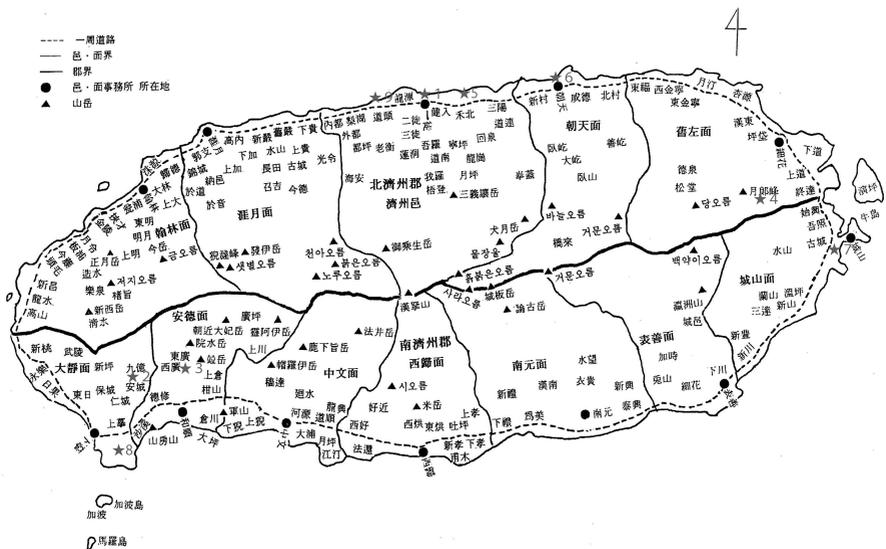
¹⁷ 文京洙教授は、私たちの海外FW 出発の二週間ほど前の9月26日(水)に本学まで来てくださり、教室セミナーで済州島4・3事件に関して講義をしてくださった。海外FW 参加者にとって貴重な事前学習となった。

第2表 濟州島4・3紀行の旅程

	訪問場所	備 考
10月9日 (火) 濟州島 到着	龍頭岩、龍淵	溶岩流出により形成された特異な海岸地形で濟州市内の観光地
	三姓穴	濟州島の始祖とされる高・梁・夫の三氏が地中から生まれ出たとされる伝説地（濟州市内の観光地）
	濟州島民俗自然史博物館	濟州島の火山島としての成立、自然史的特徴および濟州島民俗文化についての博物館
10月10日 (水) 濟州市内 4.3遺跡	★9 濟州飛行場遺骨発掘地	4.3後の捕縛者の処刑と闇埋葬（1948年12月～1948年3月、1949年10月）、朝鮮戦争後の予備検束者の虐殺（1950年6月以後）と闇埋葬の場所
	★1 觀徳亭	三一節での警察の発砲現場（1947年3月1日）武装隊司令官李徳九の遺体がさらされた場所（1949年6月6日）
	4・3平和公園	4・3特別法に基づく慰霊公園（慰霊施設と記念館）（2003年3月竣工）
10月11日 (木) 濟州島 西部地域 4.3遺跡	★3 失われた村東広里무등이왓（ムドンイワ）	討伐隊による虐殺と焼き討ち（1948年11月15日）、以後も数次の討伐により住民逃避
	楮旨里平和博物館	太平洋戦争末期に建設された日本軍の洞窟陣地
	★2 九億里「4・28平和会談」場所	武装隊長金達三と第9連隊長金益烈の平和交渉（1948年4月28日）の現場
	알뜨르（アルトゥル）飛行場跡地	太平洋戦争末期に建設された日本軍の飛行場跡地
	★8 첫알오름（ソダルオルム）虐殺跡地	朝鮮戦争勃発後の予備検束者虐殺地（1950年8月20日）
	松岳山海岸洞窟	太平洋戦争末期に建設された日本軍の魚雷の洞窟陣地
	★8 百祖一孫之地	첫알오름（ソダルオルム）虐殺者の墓地・慰霊碑（1956年5月18日に建立されるが、1961年軍事政権成立後、6月15日に破壊される）
西帰浦正房瀑布	東広里住民などの虐殺地（1949年1月22日）	

10月12日 (金) 濟州島 東部地域 4.3遺跡	★7 城山浦터진목 (トジンモク) 虐殺地	城山面地域住民の虐殺地 (1948年11月~1949年2月) と慰霊碑
	★4 失われた村細花 里다랑쉬 (タランシ) マウル	1948年11月頃、村人は各地に疎開、村は焼き討ち
	★4 다랑쉬 (タランシ) 窟	다랑쉬 (タランシ) マウル付近の地下窟で逃避民11人が討伐隊によって虐殺された現場 (1948年12月18日)
	★6 朝天邑北村里너 문충이 (ノブンスン イ) 記念館	4.3事件で最大の虐殺 (1949年1月17日) についての展示場、慰霊碑、순이삼촌 (順伊おばさん) 記念碑などがある。
	★5 失われた村濟州 市禾北洞코널洞	討伐隊により焼き討ち、村民の虐殺 (1949年1月4日)
10月13日 (土) 濟州島 出発	洛善洞4・3城	4・3当時、武装隊の攻撃を防御するために造られた4・3城の復元地
	濟州北初等学校	三一節集会のあった旧濟州北国民学校 (1947年3月1日)

第1図 4・3事件当時の濟州島



出所：申相俊『濟州島四・三事件 (上巻)』(韓国福祉行政研究所、2000年)
 注：★は本稿で言及する訪問地であり、場所については第2表に示してある。

4・3事件の遺跡地を探訪したのは、10月10日～12日の実質3日間である。到着した9日は4・3事件とは関係なく、濟州島市内の数カ所の観光地を回った。ただ龍淵は、4・3事件を韓国ではじめて社会的に知らしめた小説『順伊おばさん』の作者玄基榮が、幼少期の4・3事件当時、疎開して遊び回った地として彼の自伝的小説『地上に匙ひとつ』に出てくる¹⁸。龍淵は、そのごく限られた空間だけであるが、玄基榮の表現を借りれば、「奇岩絶壁と青い水の輝きがよく調和し秀麗な景観」¹⁹をなしている。ここは漢川が海に流れ込むところなのだが、わずか100メートルほど上流に歩けば、水のまったくない石だけが露出した川床になっている。その枯れ川もすぐ上流部で覆蓋されて、濟州市の街の下に消えてしまっている。市街地の一角にこんな神秘的な場所があることがとても不思議である。秋が深まった季節であったためか、あるいは、もう時代が違うのか、玄基榮の幼少時代のように、ここで遊び回る子どもの姿は見かけなかった。

第2図 龍淵の景観 (2012年10月9日撮影)



¹⁸ 玄基榮 (2002)、237～241ページ。

¹⁹ 同上、238ページ。

13日は滞在最後の日であり、帰国するため時間的制約があり、団体で行動せず、各自、出発まで自由行動としたが、わたしは一人で洛善洞4・3城と旧濟州北国民学校を訪ねてきた。これらについては関連するところで少し触れることにしよう。

実質3日間の訪問であったが、動線を考慮した効率的な行程であり、しかも、それぞれの訪問地ではその場の事件について金所長が詳細に説明して下さったため、実に密度の濃い現地学習となった。この3日間の行程で、一部には4・3事件とは直接関係のない旧日本軍の軍事施設、また城山浦日出峰のような世界遺産の景勝地も含まれていたが、これは日本から来た学生たちであることと、せっかく風光明媚な濟州島に来たのだからという金所長の配慮だと理解した。

さていよいよ訪問地について具体的に見ていくことにするが、本稿は、4・3事件を理解することを目的としているため、訪問順ではなく、4・3事件の展開過程に従って記述していくことにする。なお4・3事件とは直接に関係のない訪問場所については言及しない。

3 濟州島4・3事件の起点＝3・1節発砲事件の現場：觀徳亭

觀徳亭は濟州島4・3事件の起点となった1947年3月1日、発砲事件が起こった現場である。觀徳亭とは、朝鮮時代の1448年（世宗30年）、濟州島においては牧使申淑晴の時代、軍事訓練を目的として建てられた建物だが、官民が一緒に公事を議論したり、時には罪人を罰したりする場所としても使われたところであった²⁰。濟州ではもっとも古い建物の一つで宝物322号に指定されている²¹。朝鮮時代、濟州地方を統治する官庁であった濟州牧官衙の建物群の一つを成していた。

²⁰ 濟州4・3研究所（2011a）、10ページ。

²¹ 『濟州牧官衙』案内パンフレット、23ページ。

しかし濟州牧官衙の建物群は、日本植民地時代に取り壊され²²、1947年3月1日の発砲事件があった当時は、觀徳亭しか残っていなかった。いまは觀徳亭の横の道路を車がひっきりなしに行き交い、周囲には高いビルも建ったためか、そのなかに埋もれて目立つほどの大きな建物とは言えない。2002年、濟州牧官衙の復元事業が完成して、朝鮮時代当時の雰囲気を感じさせている。いまもここは濟州市の中心地にある重要な観光スポットの一つになっている。

觀徳亭の前は、それほど広いわけではないが、広場になっていて、ここを觀徳亭広場と呼ぶこともある。観光客は、この広場に立って觀徳亭を眺め、そして多くは、すぐ横に復元された濟州牧官衙を見学していく。わたしたち一行は、10月10日の午後、本稿の最後に述べる濟州飛行場遺骨発掘現場跡を見学した後ここにやってきた。さらにこの後、濟州平和公園訪問の予定があるため、時間の余裕がなく、濟州牧官衙は見学しなかった。この広場で3・1節発砲事件について金所長から説明を聞いた。第3図の写真のように觀徳亭の正面には朝鮮時代、城門の外に守護神として建てられたというトルハルバン (돌하르방) が2基、移設されて立っている。朝鮮時代のトルハルバンは、濟州島内に45基あって、そのうちの2基だそうである。これも濟州島の観光スポットを盛り立てている。

²² 同上パンフレット、5ページ。觀徳亭も植民地時代に屋根のかたがらが毀損されたと現地で金所長から説明があった。觀徳亭も2006年の復元工事により本来の姿を取り戻したという (<http://www.nocutnews.co.kr/show.asp?id=298346>)。

第3図 現在の観徳亭 (2012年10月10日撮影)



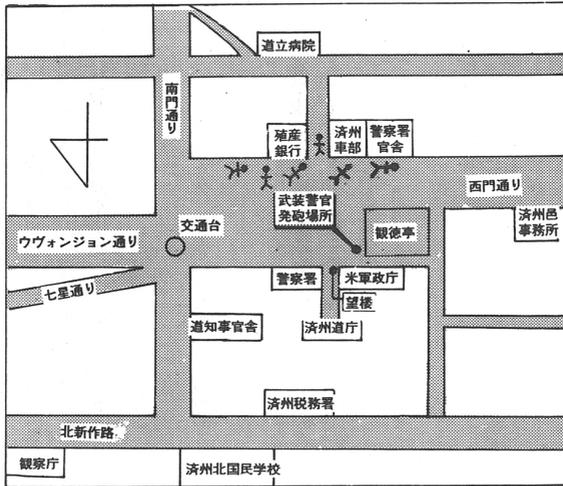
さて、1947年3月1日の発砲事件当時、観徳亭付近は、第4図に示す略図のようであった。先に述べたように濟州牧官衙の建物はなく、現在、濟州牧官衙が復元された地には、観徳亭側に米軍政庁と警察署、中央に濟州道庁、その東側に道知事官舎、濟州北国民学校に面したところに濟州税務署などが位置していた。つまり当時、ここは濟州市街地の中心にとどまらず、行政の中心地であった。

1947年3月1日、3・1節の記念式典が濟州市内の濟州北国民学校で行われた²³。3・1節とは、言うまでもないが、1919年3月1日に起こった植民地時代最大の抗日民族運動を記念する日のことを言う。濟州北国民学校での記念式典は、南労党など左派勢力が主導した集会であったが、約3万人の人々が集まった。それは「耽羅開闢以来最大の人数が集まった」というほどおびただしい数の人々であった²⁴。

²³ 濟州市内では、濟州北国民学校の集会に先だって、学生たちを中心とした集会が五賢中学院において開催された（濟民日報 四・三取材班（1994）、216ページ）。

²⁴ 同上、217-218ページ参照。「耽羅」とは古代濟州島の王国の呼び名である。

第 4 図 観徳亭付近と 3・1 節発砲事件死亡者被弾略図



出所：済民日報 四・三取材班『濟州島四・三事件 第 1 卷・朝鮮解放から四・三前夜まで』（新幹社、1994年）、223ページ。

この集会は、3・1節を記念するという汎民族的な性格を帯びていたもので、これだけ多数の人々が集まったのだろう。しかし、それを左派勢力が主導していたので、独立問題をめぐっては、左派の主張が濃厚であった。この集会で開会のあいさつをした済州島南労党委員長の安世勲は、「三・一精神を継承し、外勢を追い払い、祖国の自主統一を達成し、民主国家を建設しよう」と発言した²⁵。主催者は信託統治賛成の立場を明確にしていたが、参加した人々がすべてそうであったわけではなかった。群衆たちは村ごとに参加して、それぞれスローガンを掲げていたが、その中には「信託統治絶対反対」というものもあったという²⁶。植民地か

²⁵ 同上、218ページ。

²⁶ 同上、219ページ。1934年生の文チョンヨル氏（済州道教育委員会前委員）は、「信託統治絶対反対」とスローガンを叫びながらスクラムを組んで行進したと証言している（済州平和財団（2012）、16ページ）。

ら解放されて間もないこの時期に、3・1節を挙民的に記念するという
ことで多くの人々が集まったのであり、ここに集まった人々がすべて信託
統治をめぐって明確な意識をもった人々であったとはいえないよう思わ
れる。また南労党の公式の立場は、信託統治賛成であったが、左派の人々
の中にもこれにじっくり同意できない人々もいたようである²⁷。

さて、済州北国民学校は、第4図からわかるように観徳亭からは道庁
をはじめ各官庁をはさんですぐ北側に位置していた。この済州北国民学
校は、済州北初等学校として現存している。海外FWの最終日の10月
13日、わたしは一人でここを訪れた。校門の脇に「最初の学校の地」と
いう石碑があり、この学校が1907年、済州島最初の学校として建てら
れたことを記している。また校庭内にはペンを象徴したモニュメントが
建っていた。説明文によると、このモニュメントは「百年の学びの地、
千年の希望」と題するモニュメントで、開学100周年を記念して2007年
に建てられたものであった。現在の校庭は、第5図のように中央部が自
然芝、その周囲は人工芝になっていて、日本の小学校の校庭よりもずっ
と整備されているように見えた。しかし、広さはほぼ日本のふつうの小
学校と大差はない。果たして3万人もの人々がここに入りきれたらう
かと疑問に思った。それだけたくさんの人々が集まったら、校庭内は立
錐の余地はなかつたらうし、恐らく校庭の外にも人々が溢れ出ていた
と思われる。そんな想像をしながら校庭を眺めた。

²⁷ 信託統治案は、1945年12月28日、モスクワにおける米英ソ外相会議の結果、発表されたが、左派も発表直後はこれに反対した。やっとな植民地から解放された朝鮮民族の立場を考えれば、5年間の信託統治とはいえ、外国による統治がなお継続することに反発する心情は当然のように思う。その心情は、政治的に左右を問わずあつたらう。しかし共産党は、ソ連の指示で数日後に信託統治賛成の立場に転じたのである。済州島の南労党員でのちに日本に脱出した金時鐘氏は済州島の南労党の内部で信託統治をめぐって葛藤があつたことを証言している。彼によれば、南労党の建前は信託統治賛成であつたが、北に民主基地をまず建設するという観点からむしろ信託統治は阻害要因だと考えるようになったと述べている（金石範・金時鐘（2001）、43～62ページ参照）。

第 5 図 旧濟州北国民学校の現在 (2012年10月13日撮影)



さて濟州北国民学校の記念行事は午後 2 時頃に終わったが、学校を出た人々は示威行進をしながら帰宅の途についた。濟州の西部から来た人々は、道知事官舎前を通り、右折し、觀徳亭の前を経て西門通りを通過して西に向かった。東部から来た人々は、北新作路から東門通りに出て東に向かった²⁸。発砲事件は、觀徳亭の前で起こったのだが、これまでの目撃証言を総合するとほぼ以下の通りである²⁹。

事件の発生は 2 時 50 分頃のことである。その頃、すでに觀徳亭の前は、西に向かうデモ隊が通り過ぎていて、周囲は 100～150 人くらいの見物人がいるだけだった。そのとき、濟州北国民学校の方から騎馬警官を乗せた一頭の馬がやってきて、觀徳亭の方に右折するとき、小さな子どもに接触して蹴倒してしまった。しかし、騎馬警官は気づかなかったのか、あるいは気づいても知らぬ振りをしたのか、倒れた子どもをそのままに觀徳亭前の警察署の方にそのまま走り去ろうとした。この出来事を周囲の人々が見とがめて、その騎馬警官を追いかけて始めたことが発端であっ

²⁸ 同上、218 ページ。

²⁹ 同上、218～230 ページ参照。ここには、数名の現場目撃者の証言が載せられている。

た。その直後に観徳亭前に配置した武装警官からと警察署前の望楼から群衆に向けて発砲があったのである³⁰。

この発砲によって6人が死亡し、6人が重傷を負った。犠牲者は一人を除いてみな背中を撃たれていた。なお発砲事件は、この直後、道立病院前でも起こった。観徳亭前で銃に撃たれた負傷者を背負って道立病院に担ぎ込もうとした住民に向けて道立病院前にいた警察官が発砲したのである。ここでは2人が重傷を負った。

以上が3・1節発砲事件のあらましである。いったい何故、この発砲事件が起こったのか、実に疑問である。警察は、その後、道立病院前の発砲については非を認めたが、観徳亭前の発砲については、群衆の襲撃に対してやむを得ない正当防衛であったとしたのである。すなわち、1947年3月19日、趙炳玉警務部長は3・1節発砲事件の真相調査結果について談話を発表した。その談話のなかでこう述べている。

…… 一千名にのぼる学徒軍を中心として、まず済州監察庁襲撃の態勢をととのえ、警察当局の忠告命令に服従を仮装し、同管内第一区（北済州）警察署にその余勢を結集して襲撃の態勢を整備し、怒濤のごとく近距離から殺到した。同署の警察当局は、忍耐に忍耐を重ね、忠告と警告を繰り返したが、群衆は解散を肯じず、昨年十月暴動における悲惨な経験を参考に、やむをえず発砲したのである³¹。

趙炳玉のこの正当防衛発言は、多くの目撃証言によって明らかにされた事実とはあまりにもかけ離れている。正当防衛を主張するために事実を歪曲していると言わざるを得ない。しかし、その歪曲した発言の中にあえて本音を見出そうとすれば、「昨年十月暴動における悲惨な経験」

³⁰ 前述した金時鐘氏はデモの整理班要員として観徳亭向かいの殖産銀行のところで事件を目撃していた。彼によれば、警察隊の後ろに米兵が横一列に布陣していたという。その布陣からして、発砲命令は米軍がしたと述べている（金石範・金時鐘（2001）、73ページ）。

³¹ 同上、274ページ。

という部分が注目される。ここで「十月暴動」とは、米軍政の食糧政策に抗議して1946年10月、大邱にはじまり、その後、各地に拡散した民衆抗争である。この過程で各地の警察署が襲撃され、多数の警察官が犠牲となった。実は観徳亭前に配置され、発砲事件を引き起こした警察官たちは、事件直前の2月23日、急遽、忠北・忠南から派遣された応援警察官たちであった。彼らは前年「十月暴動」を経験していた。このため群衆に対して非常に過敏になっていた可能性がある。

ところで濟州島になぜ応援警察が派遣されたのか、これは一つの謎である。濟州島で3・1節に行事の計画があることは知られていたとしても、3・1節行事はなにも濟州島に限られていたのではなく、全国各地で計画されていた。しかも、前年の「十月暴動」のような激烈な衝突はこれまで濟州島ではなかった。「十月暴動」のとき、濟州島は他の地域と違って平穏だったのである。3・1節行事を前にして、むしろ半島部の各地の方こそ不測の事態が予想されたはずである。にもかかわらず、その地域からあえて応援警察を濟州島に派遣する必要があったのか、という疑問である。

この点について、現地を案内してくれた金昌厚所長は、3・1節発砲事件が実は米軍政によって巧妙に仕組まれたものではなかったかと思うと話しておられた。これを口実に3・1節行事を主導した左翼勢力を弾圧するためのフレームアップであったとする解釈である。実際に3・1節発砲事件以後、そのようにことは進んだことは確かである。

しかし、それはやや穿ち過ぎた解釈のように思う。恐らく真相は突発事故ではなかったかというわたしは想像する。突然、騎馬警察を追って向かってくる群衆の行動に、前年の「十月暴動」の経験から恐怖心を抱いた応援警察官たちが過剰反応したのではないかと考えたからである。ただ、仮にそうであったとしてもそれは正当化できるような対応とは言えない。ましてや趙炳玉警務部長のように正当化するために事実歪曲することは許されない。ただ、何故、濟州島に応援警察が必要であったかに

については依然として謎のままである。

それは措くとして、先の趙炳玉の談話文が発表されたのは、3・1節発砲事件に抗議する全島的な3・10ゼネストがはじまり、急遽、趙炳玉が3月14日～19日の間、済州島にやってくる視察した後のものである。この6日間の済州島滞在期間、趙炳玉はゼネストに対して、はなから敵愾心をもって臨んだ。そして彼の滞在中に約400人以上の応援警察を増援し、ストライキ参加者の大量検挙を開始するのである³²。

趙炳玉の済州島訪問は、最初から発砲事件の真相を探ろうというよりは、徹頭徹尾、ゼネストを弾圧することにあつたように思われる。最初から3・1節行事の主催者とゼネスト主導者を除去すべき左翼勢力と決めつけ、その弾圧を正当化するために発砲事件の真相を歪曲したように考えられる。彼はソウルに到着した翌日、軍政庁出入りの記者につぎのように語ったと記録されている。「今回の済州島における不祥事は、北朝鮮の勢力と通謀し、米軍政を転覆せしめ、社会的混乱をひきおこそうとする一部の策動により発生したものである。」³³

趙炳玉のこうした強硬な措置は、一年後の4・3武装蜂起の導火線になっていくのである³⁴。趙炳玉の来島以後、済州島行政の穏健な指導部は、済州島外から来た強硬な指導部に交代していく³⁵。警察力も済州島外から来た応援警察や済州島外出身者が多数を占めるようになる。38度線以北から逃れてきた青年たちで組織された西北青年会（西青）など右翼団体も来島する。彼らは徹底した反共主義者であり、左翼勢力弾圧の急先鋒となった。のちに警察や軍隊に入って武装隊による討伐作戦で活躍す

³² 同上、257～280ページ参照。

³³ 同上、279ページ。

³⁴ 以下の3・1節以後、4・3武装蜂起までについての詳細は、同上、285～492ページを参照されたい。

³⁵ 最初の済州道知事は済州島出身の朴景勲であったが、知事は済州島出身ではない極右の柳海辰に交替した。彼は済州島着任の時に西北青年会員を連れてきた（同上、333ページ）。一方、朴景勲はのちに左翼勢力の大衆組織である済州島民戦の議長に就任した（同上、401ページ）。

るのである。

1947年9月以降、第二次米ソ共同委員会が決裂し、米国が朝鮮問題を国連に付託したことで、モスクワ協定による統一的な臨時政府樹立と信託統治の実現が遠のいた。米国は国連監視下での総選挙実施に向けて注力していく。モスクワ協定にもとづく統一政府樹立を支持し、米国家に反対する左翼勢力に対する弾圧はより厳しいものになっていく。年が明けて1948年1月以降になると、国連監視下の選挙が北朝鮮の拒否により南朝鮮だけの単独選挙になることが決定的になった。2月以降、左翼勢力はこれに対して激しい反対運動を展開していくことになる³⁶。そのような状況で濟州島では、1月22日、南労党幹部が大量に検挙される事件が起こる³⁷。その結果、濟州島の南労党指導部は強硬派の若い世代に交代していくことになった。3月には3件の拷問致死事件が発生する³⁸。これらの事件は警察に対する濟州島民の反感を拡散させることになったのである。3・1節発砲事件以来、一年間の左翼勢力に対する弾圧で追い詰められた南労党の若い指導部は、武装蜂起による反撃を決断したのである。

ところで觀徳亭は、こんにちもそうであるが、当時も濟州の中心地であり、人々が多数行き交う場所であった。また当時は、すでに述べたように、すぐ横に濟州警察署があった。このような場所であったからであろう、1949年6月8日、前日、討伐隊に射殺された武装隊長李徳九の屍

³⁶ 米軍司令部情報参謀部 (G2) の報告によると南朝鮮全域で49年2月に125件、3月に114件の警察官署の襲撃があったと記録されている (同上、487ページ)。このため、4・3武装蜂起も当初は、全国的な襲撃事件の一つと考えられていたようである (同上、486～488ページ)。

³⁷ 1948年1月22日に106名、その後1月26日までにさらに115名の南労党員が検挙され、南労党濟州島党は組織露出による危機に直面した。しかし、米軍政のもとで南労党は合法政党として認定されていたので、大多数は4・3武装蜂起以前に釈放された (同上、438～444ページ)。

³⁸ 3月4日、朝天主署で朝天中学院2年の金用哲 (21歳)、3月14日、募瑟浦支署で梁銀河 (27歳) が拷問で死亡し、3月29日、翰林面金陵里で朴行九が警察と西青によってリンチ殺害された (同上、463～481ページ)。

が十字架に架けられて、濟州の人々にこれを見よ、とばかりに晒された。首を傾げ、上着の胸ポケットには匙が一つ入っていたという³⁹。最初のところで紹介した玄基榮は、彼の自伝的小説『地上に匙ひとつ』でその情景を以下のように描いている⁴⁰。

観徳亭広場に邑内の人々が群がったなか、掲げられた彼の死体はカーキ色の日本軍服のみすぼらしい姿であった。ところで執行人の失敗だったのか、いたずらだったのか、その死体がイエス受難の象徴である十字架に高くつるされていた。そのせいか、見物する大人たちの表情は万感迫るように心乱れ落ち着かなく見えた。二本の腕を伸ばしたまま、横に傾いた顔、口元から流れ落ちた血の筋が凝固していたが表情は眠るように平穏であった。そして執行人が前ポケットにわざわざ差し込んだ匙一つ。その匙が死体を嘲弄していたが、それを見て笑う人はいなかった。

第6図 観徳亭前に晒された李徳九



出所：4・3平和記念館に展示された写真（2012年10月10日筆者撮影）

³⁹ 許善榮（2006）、89～90ページ。前掲、文京洙（2008）、142～143ページ。李徳九は、のちに本文で述べる金達三の後を継いで武装隊長となった人物である。もともとは、朝天中学院の教員であった。

⁴⁰ 前掲、玄基榮（2002）、63ページ。

観徳亭前に晒された李徳九の姿を4・3平和記念館に展示された写真(第6図)で見ることができた。この写真で、十字架上の李徳九を見つめているのは、何故かほとんどが子どもたちである。当時、小学生だった玄基榮もここにいたのだろうか。玄基榮が小説の題名に「匙一つ」としていること、そして李徳九のポケットに匙が一つ差し込んであったということ、このことに私は興味を覚え、金所長に訊いてみた。彼の説明によると、武装隊は山で日々、移動しながら活動をしていたので常に匙を携帯していたという。執行人がポケットに匙を差し込んだのは、恐らく匙一つしか持たない、みすばらしい生き様を見せようとしたのだろうとの解釈であった。

李徳九が晒された場所は、復元された濟州牧官衙のちょうど入口辺りであるとの説明を受けた。わたしは特別な思いで改めて濟州牧官衙の入口を眺めた。

4 4・28 平和会談の現場：九億里国民学校跡地

1948年4月3日未明、濟州島の各地のオルム(寄生火山)にのろしがあがり、これを合図に武装隊による警察署、右翼への襲撃が開始された。このとき島内24カ所の警察支署のうち11カ所と右翼団体の宿所や右翼要人宅が襲撃された⁴¹。武装隊は蜂起にあたって、警察、公務員や右翼団体に宛てて「弾圧には抗争」と訴えたピラと、島民に宛てて「単独選挙反対」を訴えたピラを撒布した⁴²。このピラの主張から、彼らの武装蜂起が、第一には、これまでの警察や右翼団体の横暴に対する防衛的な抵抗運動であるという面と、第二に、南北分断をもたらす単独選挙の阻止をめざした政治闘争という面を持っていたことを示している。4・3武装

⁴¹ 済民日報 四・三取材班(1995)、19～34ページ参照。なお、このときの襲撃で、警察官は死亡4人、負傷8人、行方不明2人、右翼など民間人は死亡8人、負傷19人を出し、一方、武装隊も3人が死亡し、1人が逮捕された(同上、33ページ)。

⁴² 同上、77～79ページ。

蜂起について、このどちらの性格を重視して捉えるかによって4・3事件の見方は異なってくる。文京洙教授は、9月26日の教室セミナーで、第一の観点を済州島という地域的文脈からの観点、第二の点を朝鮮半島・東アジアないし国際政治の文脈からの観点と捉え、そのどちらを重視して考えるかが重要な争点になると強調された。

これについて私見を述べておきたい。マクロに見ると、4・3事件は、この二つを併せ持っていたと考えるべきだろう。しかし、ミクロに捉えるとき、とくにここに関わった主体によっては、二つのうちいずれかの立場であったということがありうる。例えば、武装蜂起を主導した南労党幹部は第二の文脈を重視した可能性がある。ただ武装隊の中にも第一の文脈を重視した者もいただろうし、武装隊に同調した住民の多くはそうした可能性が大きい。一方、討伐する側にあっては、第二の脈絡で捉えての討伐であったと基本的には言えるが、すぐ後に言及する第9連隊長金益烈は、事件を第一の文脈で見ている。また4・3事件は、第一とも第二とも理解しないままに、ただこの事件に巻き込まれ、翻弄された人々が多数いたとも言えるだろう。

さて4・3事件勃発後、鎮圧のために済州島南西部の琴瑟浦に駐屯していた警備隊第9連隊に警察からの支援要請があったが、第9連隊の金益烈連隊長は、「先宣撫、後討伐」を主張して即座には応じなかった。警備隊はのちに韓国樹立後、国軍となるが、当時はまだ米軍政のもとで、装備の面でも警察の補助的存在であった。警備隊員のなかにはこれを不満に思っていたし、警察に反感を抱く者もいた。第9連隊長の金益烈は、4・3武装蜂起を警察や右翼団体の住民に対する横暴な振る舞いに対する反撃だと考えていた⁴³。米軍政は、金益烈に討伐への出動を命じた

⁴³ すぐあとの本文で言及する金益烈の遺稿録「4・3の真実」で、彼は4・3武装蜂起の原因をつぎのように把握している。「暴徒の中には共産主義者もいるであろうし、その他にも社会主義者・排他主義者などさまざまな要素が混合していたであろう。そして、それぞれが自分なりの闘争目標をかかげていた。しかし、主義・理念のスローガンはほとんどが偽装か、借り物に過ぎず、一皮剥けば、警察に対する恐怖や恨みが暴

が、彼は上述のように「先宣撫、後討伐」を主張した。米軍政も彼の主張に同意し、試みられたのが武装隊との平和会談であった⁴⁴。ここから判断すると、米軍政庁側も当初、強硬措置一辺倒ではなかったのかもしれない。

さてこの平和会談をめぐるのは後で述べるように興味深い論議があるのだが、これまでの通説では1948年4月28日、九億里国民学校において行われたとされている。その論拠になっているのが、金益烈自身が遺稿として残した「四・三の真実」と題する証言録（以下、遺稿録）である⁴⁵。遺稿録は、読み物としても非常に面白い。そして何よりも遺稿録に従うならば、この平和会談は4・3事件のなかで非常に重要な意味を持っている。実際、あとで論議するように、通説もそのように考えている。

ところで、金昌厚所長の当初案では訪問地のなかに、ここが入っていた。しかし、遺稿録を読んで、わたしはぜひ行ってみたいという気持ちになり、特別にお願いした場所なのである。

10月11日の昼頃、九億里国民学校跡地とされる場所に到着した。その場所は、第7図のような所であった。道路脇から見学したのだが、右手に廃屋があり、その左手は畑になっている。この畑の正面奥の一角が九億里国民学校跡地だと説明であった。正直言って、ここに昔、学校があったとはあまり思えない場所であった。しかし、昔の地図などをもとにしてこの地が九億里国民学校の跡地だと特定されているのだろう。金所長自身、ここを訪ねるのは10年ぶりだそうである。わたしの訪問希望があったために、実は一週間前にわざわざ確かめにやって来たとのこ

動という形で現れたのだ、と私は確信していた。」(同上、261～263ページ。)そして遺稿録の最後の部分で「私は濟州島四・三事件を、米軍政の監督不足と失政によって島民と警察が衝突した事件であり、官の極度の圧政に耐えることのできなかつた民の最後の手段として起こした民衆暴動だとみる。」(同上、300ページ)と結論している。⁴⁴ 同上、93～111ページ。

⁴⁵ 金益烈が自分の死後に公開するようにと家族に遺言していたため遺稿録と呼ばれる。これは、済民日報四・三取材班が、その後、遺族の同意を得て公開した。同上、229～301ページに付録として掲載されている。

とであった。

現地で金所長も話していたが、会談場所は違う場所ではないかとの説もある。遺稿録では「済州島で最も高い位置にある山間部の国民学校」とあって、「九億里国民学校」と金益烈自身は書いていない。遺稿録には、そこから「第九連隊の領内が肉眼で見下ろせる」と書いている⁴⁶。しかし、九億里国民学校跡地とされた現場は比較的高い位置にあるが、第九連隊の駐屯地（現在は海兵第9大隊駐屯地）を見下ろせるような所ではない。現地で金所長も、第九連隊駐屯地のあった琴瑟浦にもっと近いところではなかったかという説もあると説明されていた。

第7図 4・28平和会談会場九億里国民学校跡地（2012年10月11日撮影）



さて金益烈の遺稿録では、平和会談の情景が目浮かぶように描かれている。ここでわたしが興味深く感じたのは、会談相手の武装隊長金達三に対する金益烈の描き方である。金益烈は、金達三についてこう書いている。「目、鼻、耳、なに一つ欠点のない美男子だった。誰にでも好

⁴⁶ 同上、271ページ。

感を与えそうな青年だった。また、たいへん謙遜で沈着に見えた。」⁴⁷と、かなりの褒めようである。その後、金達三とのやり取りを具体的に描いているが、彼に対して人間的には非常に好印象を持ったように思われる。

金達三は、その後、南朝鮮の単独選挙に対抗して、北朝鮮が1948年8月、海州で開催した人民代表者会議に出席した。その会議で主席団の一人に選ばれ、濟州島での単独選挙ボイコット闘争の戦果を報告して喝采を浴びたという⁴⁸。こうした客観的状況からすれば金達三が共産主義者だと考えざるを得ないが、金益烈は、「彼が本当の共産主義者かどうかは定かではない。」⁴⁹と述べている。4・3蜂起は共産主義者の暴動ではないという金益烈の見方が、その首謀者に対する見方にも作用しているように思われる。

金益烈の遺稿録「四・三の真実」によれば、平和会談は戦闘行為の停止と武装隊の武装解除・帰順について基本的な合意に至ったとされる⁵⁰。会談後、合意について軍政長官に報告し、軍政長官もこれを承認して戦闘は中止され、「久しぶりに濟州島は銃声がやみ平穏を取り戻した」⁵¹と金益烈は記している。そして帰順と武装解除もはじめこそは不調だったが、その後、しだいに増えはじめていたという。

⁴⁷ 同上、271～272ページ。

⁴⁸ 前掲、文京洙 (2008)、116ページ。

⁴⁹ 前掲、濟民日報 四・三取材班 (1995)、298ページ。

⁵⁰ 金益烈の要求条件は、①武装隊の戦闘の即時中止、②武装隊の武装解除、③殺人犯・放火犯などの自首であり、金達三の要求条件は、①濟州島民による行政官吏・警察の構成、民族反逆者・悪質警察官および西北青年たちの追放、②濟州島民で警察が構成されるまで現警察を解体し、軍隊（警備隊）が治安担当、③義拳参加者全員を罪に問わず、安全と自由を保障するというものであった。金益烈の要求①は72時間以内の戦闘停止、②は段階的武装解除で合意、金達三の要求①は金益烈に権限はないが、独立すれば自然にそうなるだろうとの見解で納得、②は現警察を解体しないが、軍隊の指揮下に入ることで合意した。両者の要求③について最終的に金益烈が違法者の名簿を作成し、提出すれば、その者が自首しようが、逃亡しようが問わないとの妥協案で合意したと書いている (同上、276～278ページ)。

⁵¹ 同上、280ページ。

ところが、そんなところへ、ある事件が起きて、平和工作はぶち壊しとなった。事件とは、「吾羅里事件」と呼ばれているが、1948年5月1日、済州邑吾羅里で起こった放火事件のことである。金益烈は、それが武装隊を偽装した警察や右翼青年による仕業だと主張している⁵²。こうして、結局、平和会談の合意は水泡に帰したのである。

この平和会談で金益烈連隊長に同行した李允洛氏（当時、第9連隊情報主任）は、後日、「われわれのやり方で収拾したならば、あれほど酷い流血事態は避けられたはずなのに、米軍と警察がこれをぶち壊した」⁵³と述懐している。

以上、述べてきたことが、事実であるなら、この4・28平和会談は4・3事件の分水嶺をなす出来事であった。すなわち、警察と右翼青年たち、それを支持した米軍によって妨害されず、この会談の合意に従って平和的解決が実現していたならば、上に紹介した李允洛氏の言うように、その後の事態は大きく変わった可能性があったからである。そのような意味で、この会談は、4・3事件の過程で非常に重要な意味を持つ出来事であったと言える。すでに述べたが、4・28平和会談の現場をぜひ見みたいという気持ちになったのもそうした理由からである。

さて、4・28平和会談の意義については、上述のような評価が通説となっていた。真相究明委員会の報告書でも「この平和交渉は済州4・3事件の展開過程において非常に重要な分かれ道であった。交渉が失敗に帰することで流血事態が起り、…」と述べている⁵⁴。

ところが最近、こうした見方を否定する議論が登場していることを知って仰天した。それを知ったのは、海外FW 出発前、事前学習会として行った教室セミナーの席であった。講師の文京洙教授から、4・28平

⁵² 同上、281ページ。吾羅里事件については、同上125～150ページに複数の証言も含めて詳しく記録している。

⁵³ 同上、121ページ。

⁵⁴ 前掲、済州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会（2003）、192ページ。

和会談について、平和会談の開催日時や開催場所が違う、交渉が合意したとは考えられない、平和的な收拾の可能性はすでになかったなど、これまでの通説を覆すような主張の研究があることを教えられた。金ヨン Chol 『濟州4・3事件初期警備隊と武装隊交渉研究』（濟州大学校大学院 史学科修士論文、2009年、以下、金ヨン Chol 論文）がそれである。この日、わたしは文先生からこの論文を借りて、それを興味深く読みはじめた。

金ヨン Chol 論文のいわば通説批判の主たる論拠は、皮肉なことであるが、金益烈自身が書いたもう一つの証言録なのである。金ヨン Chol 論文によってはじめて知ったのだが、金益烈は、遺稿録とは別に、平和会談についても一つの証言録を残していたのである。それは平和会談後、まだ間もない、1948年8月6日～8月8日にかけて、『国際新聞』に連載した寄稿文である⁵⁵。連載の最後に「1948年6月」と記してあるので、恐らくこの時に記したものと思われる。つまり平和会談後2ヶ月も経過していない時期である。この証言録については、金ヨン Chol 論文に倣って、以下、寄稿文と呼ぶことにする。

金益烈の寄稿文を読んで、遺稿録といろいろな点で余りにも違うので正直、当惑した。最初に遺稿録を読んでいて、そこからたいへん大きなインパクトを与えられていただけに、ある意味でショックであった。金ヨン Chol 論文をコピーしたのち、借りた論文を文京洙教授へ返送するにあたり、以下のような感想を記してメールを送った。

（前略）いま早速にこの修士論文を読んでいます。最初に付録の国際新聞に掲載された金益烈の寄稿文の方を先に読んでか

⁵⁵ 寄稿文の全文は、金ヨン Chol 論文に付録として載録されている。3回に分けた連載であるが、それぞれは以下のように題目が付いている。①「同族の血で染まった濟州参戦記 前第九連隊長金益烈中領記（上）昼には農夫、夜には山の人の部隊」（1948年8月6日）、②「動乱の濟州参戦記 前第九連隊長金益烈中領記（中）花陰に覆われた司令部は蕭條」（1948年8月7日）、③「動乱の濟州参戦記 前第九連隊長金益烈中領記 彼我の一張一弛 平和手段の解決策ついに水泡」（1948年8月8日）

ら、本文を読み進めています。

1948年という早い時点で、いわばまだ直後に書いた文ですから、記憶としてはこちらの方が確かだと想像されます。しかしそれにしても日にち、場所がこうも遺稿文とはっきり違うのはどうしてなのか、非常に不可解です。場所について、前者は山奥の民家、後者は九億国民学校と、勘違いするにはあまりに違います。日にちは、不確かになりがちですが、場所やその様子についてこれほど違うというのは余り考えられないのですが。ただ金達三に対するハイカラだとする印象についてはほぼ同じですね。

同一人物が、かなり年月を隔てたとはいえ、このように証言が異なると証言の信憑性が揺らぎかねない気がします。(後略)⁵⁶

まさにここに書いた通り、寄稿文を読んで、遺稿録の内容についてその真偽に疑いを抱くようになったのは事実である。詳細な比較対照による遺稿録と寄稿文の異同についての検討は金ヨン Chol 論文でなされている。わたしは、上記、文京洙教授宛てメールにも簡単に触れたが、両者の異同についてわたし自身が重要と考えた点、印象的であった点について述べておこう。

第一に、日にちについて、遺稿録では明示していないが、「休戦四日目の五月一日」⁵⁷という記述の部分から会談日を4月28日と特定し、以後そのように理解されていた⁵⁸。ところが寄稿文では4月30日と明示し

⁵⁶ 2012年9月28日付け、文京洙立命館教授宛メール。なお、ここでわたしは、「後者(遺稿録のこと)は九億国民学校」と書いているが、すでに本文で述べたように、遺稿録で学校名は明記しておらず、「済州島で最も高い位置にある山間部の国民学校」とあるだけである。その後、この国民学校が九億里国民学校と特定され、一般にそのように考えられていて、わたしもそれを踏襲したものである。

⁵⁷ 前掲、済民日報四・三取材班(1995)、281ページ。

⁵⁸ 「休戦四日目の五月一日」とあるので、4月27日とも考えられるが、会談日を1日目と数えれば、4月28日となる。韓国ではそうした数え方はよくなされるので4月28日とすることも無理な解釈とは言えない。

ている。日にちの記憶は、あいまいになりがちである。だからわたしは、この違いをありうる錯誤と考え、あまり重要なものと考えなかった。しかし、その後、日にちの問題は、けっしてたんなる錯誤ですませない重要性を持っていることを理解した。金益烈の遺稿録の主旨を一言で言えば、合意に至った平和交渉が、警察と右翼青年の妨害活動⁵⁹によって水泡に帰したということである。戦闘停止期限は遺稿録では72時間とし、5日以後の戦闘は背信とみなす、とされていた。一方、寄稿文では合意実施まで7日とあり、ここにおいても違いがある。それは措くとして、もし会談日が4月30日だったとすれば、戦闘停止期限の合意が、遺稿録の72時間であろうと寄稿文の7日であろうと、「吾羅里事件」などの武装衝突はまだ期限内の事件ということになり、合意違反とはみなせないことになる。それが警察と右翼青年による偽装であったとしても、それによって平和合意がぶち壊しになったという議論は成り立たないことになる。この点で日にちも重要なポイントだといえる。

第二に、会談場所の違いである。場所については、すでに述べたように遺稿録では、学校の名前を明示してはいないが、学校であったことをはっきり記録している。しかし、寄稿文ではかなり山奥の一農家だとしている。場所について、本人が後日、訪ねても特定することが難しいことは確かにありうる。しかし、場所の印象まで間違えることはありえない。しかも日常的な出来事でなく、死をも賭けて臨んだ場所についてその場所の印象を間違えることは考えられない。ましてや金益烈は、その場所について詳細な情景描写までしているのである。学校と農家、これはもうまったく別の場所について語っているとしか考えられない。ということは、どちらかがまったくのでっちあげか、あるいは会談がこの二つの場所で実際、行われたことがあり、それを混同したことも考えられ

⁵⁹ 金益烈は、5月1日の「吾羅里事件」、5月3日の帰順者護衛中の警備隊と米軍兵士に対する警察の攻撃を帰順妨害活動として具体的に記している（済民日報四・三取材班（1995）、281～283ページ）。

る。実際にその可能性は排除できない⁶⁰。しかし、寄稿文が会談から間もない時期に書かれたことを勘案すると、こちらの記述の方が正確だと考えるのが自然のように思う⁶¹。

第三に、金達三に対する金益烈の印象である。これについて基本的に違いはないように、わたしは受けとめた。遺稿録での金達三の描写は、すでに示した通りであるが、寄稿文での描写をいくつか紹介すれば以下の通りである。

「まるで何か映画に出てくる人気俳優のようにさわやかで、広い額と黒い眉の下に星のように輝く二つの目、背はすこし高い方だが、体つきはそれほど健康そうとはいえない、というより、きゃしゃな方だ。」(金ヨン Chol (2009)、64ページ)

⁶⁰ 金ヨン Chol (2011) では九億里国民学校で会談があったとの多くの証言をもとに、そこで4月30日は別の日に会談があった可能性があるとして指摘している(52ページ)。武装隊側の資料として知られる文書として『済州島人民遊撃隊闘争報告書』がある。これは李徳九逮捕作戦を指揮していた禾北支署長の文昌松氏が李徳九を射殺した際に入手し、保管していて、その後、文昌松編『漢拏山は知っている 埋もれた4・3の真相』(1995年)という冊子のなかで紹介したものである。これは1948年3月15日～7月24日まで武装隊が状況を記録したものと考えられる。その内容をネットで見る事ができたが、そこにはこんな箇所がある。「4月下旬に至るまで前後2回にわたって軍責(金達三のここと一倉持)と金連隊長とが面談し、今般の救国抗争の正当性と警察の不法性を、とくに人民と国警(警備隊のここと一倉持)を離間させようとする警察の謀略などに意見の一致を見て、金連隊長は事件の平和的解決のために積極努力すると約束した(第1次会談には5連隊大隊長呉一均氏も参加、熱性的に事件収拾に努力した)」(78ページ、http://jeju.ex-police.or.kr/resource1_14.php)とある。呉一均は、のちに麗水・順川における第14連隊の反乱事件後、軍内南労党員の肅軍過程で処刑された人物である。この資料によれば、金益烈と金達三は二度会っていたことになる。

⁶¹ ただ非常に穿った見方をすると別の解釈もできる。寄稿文が発表された時期はまだ4・3事件のまっただ中であって、何らかの事情で武装隊の本拠地に関連した特定の場所を明示することが憚れて、あえて別の場所として記述し、遺稿録の時期に真相を語ったとの解釈もあり得る。この場所の問題をはじめ平和会談の謎を解明するため、金益烈に同行した李允洛氏に確認することができないかと思う。彼は第9連隊情報主任で、平和会談のお膳立てをした人物であり、真相をもっともよく知っているはずである。前掲、済民日報四・三取材班(1995)に証言者として登場しているので、もし生存されているなら彼への確認が最良の方法だと思う。

「マカオ製の紺色の上下揃いで模様のある背広と桃色のワイシャツを着て、ネクタイもソウルで流行っているマカオ製品であった。靴は米軍将校が履いているのと同じで、靴下もやはり外国製であった。」(同上、65ページ)

寄稿文は外見を強調していて、彼の態度について立ち入った表現はないが、金達三に対してかなり好印象を持ったような書きぶりである。遺稿録の方が金達三への肯定的評価の度合いが強いとはいえるが、肯定的評価という点で遺稿録、寄稿文は共通している。寄稿文の発表時期、4・3事件は進行中であり、当時、暴徒の首魁とされていた金達三に対する評価は非常に微妙であった。それを勘案すると、寄稿文でも金益烈は、金達三に対して、相当、肯定的な見方をしていたことが窺われる。

第四に、会談の成否とその後の状況についてである。会談における双方の要求事項もすでに述べた武装停止の期限を含めて違いが見られる。要求事項の違いとして重要な点は、遺稿録で言及されていない単独選挙・単独政府反対という要求事項である⁶²。考えてみれば、これは4・3武装蜂起のもっとも重要な目的の一つであり、4・3武装蜂起の際、濟州島民にビラで訴えたスローガンである。寄稿文で金益烈は、これも含めて、武装隊のすべての要求を受け入れられないと拒否した。にもかかわらず、最終的に警備隊側の要求のとおり合意したと寄稿文では書いている⁶³。武装隊が要求をすべて拒否されたままでほんとうに合意したのか疑問が残るが、ともかく金益烈は、遺稿録でも寄稿文でも会談は戦闘

⁶² 寄稿文では、武装隊の要求を箇条書きで列挙している。それは6項目で以下の通りである。①単政反対(単独選挙・単独政府反対)、②濟州道民の絶対自由保障、③警察の武装解除、④濟州道内官庁高級官吏を全面的に更迭すること、⑤官庁高級官吏の収賄者を嚴重処断すること、⑥道外青年団員の山間部落出入禁止(金ヨン Chol (2011)、67ページ)。

⁶³ 同上、68ページ。なお寄稿文において示されている警備隊側の要求は4項目で以下の通りである。①完全な武装解除、②殺人・放火・強姦犯人とその指導者の全面的自首、③いわゆる人民軍の幹部すべてを人質として拘禁する、④ただし、以上三条件は条約日より7日間である(同上、67ページ)。

停止で合意に至ったとしている。ところが、その後の状況については、対照的である。遺稿録についてはすでに述べた通り、米軍政庁の承認も得て、戦闘は一時、中止されたとされている。しかし、寄稿文によれば、会談から戻ると、最高部はその晩から総攻撃を開始せよと命令し、金益烈の平和的解決の提案は一蹴されたとされている。そして、実際にその晩から総攻撃が開始され、武装隊側も反撃したとある⁶⁴。

このことは寄稿文によって遺稿録の主旨を否定していると捉えることができる。遺稿録の文脈は、平和会談成功→戦闘行為中止（平和的解決可能性）→警察・右翼団体による妨害→平和的解決水泡というものである。しかし、寄稿文の文脈は、平和会談成功→武装隊への総攻撃開始→平和的解決水泡ということになる。つまり寄稿文は、遺稿録で一時的とはいえ現実化した平和的解決の可能性が、会談直後、すでになかったということを示している。もし寄稿文が正しいとすれば、これまで通説的に理解されてきた平和会談の意義について再考が必要になる。

金ヨン Chol 論文は、事件後間もない寄稿文の方が信憑性は高いとし、他の資料と照らし合わせたときにも、遺稿録には見られる矛盾点が見られないとして、寄稿文に依拠して、以下のように結論している。

第一に、「平和会談」の日にちと場所は、4月28日でなく、4月30日であり、場所も九億里国民学校でなく、それよりも漢拏山側の高地にあった一農家であった。第二に、「平和会談」と「吾羅里事件」とは連関がない。米軍政が総攻撃を開始するのに「吾羅里事件」を口実とする必要はなかった。実際、4月27日から29日まで激しい攻撃を警備隊も加わって開始していた⁶⁵。第三に、会談の合意について、武装隊側の闘争目標が、単独選挙阻止であったことを考えると、5月10日の選挙を前にして、武

⁶⁴ 同上、68ページ。

⁶⁵ この事実については、寄稿文においても言及している。しかも以下のように、その戦闘が激しいものであったとしている。「この戦闘は済州島掃討戦で一番激烈な戦闘であってこの戦闘で反乱軍の補給線を一部断絶させたほどであった。」(同上、60ページ)

装隊が一方的に警備隊側の主張を受け入れて合意することは論理的に考えられない。他の資料と照らして、会談は決裂したと考えられる⁶⁶。

以上、多少長くなったが、「4・28平和会談」をめぐる議論を検討してきた。「4・28平和会談」については、すでにそうした論議があることを知って九億里国民学校跡地の現地に行ったので少々、複雑な気分であった。金昌厚所長も現地で平和会談について論争があること、実際の会談の場所でない可能性があることを述べられた。しかし、どこかで平和会談が開かれたこと自体は事実だと強調された。そうだとしても、その意義を4・3事件のなかで、どう考えるか、依然として謎が多く、難しい課題だと言える。ただ、謎が多いからこそ、興味深いともいえる。

海外FWから戻り、その後、ネットで「4・28平和会談」に関して調べたところ面白い記事に出会った。池萬元という人の書いた「金益烈のミステリー」というブログ記事である。2011年3月22日～3月31日まで8回にわたって連載された記事である⁶⁷。池萬元氏は軍人出身の方でブログを通じて、歴史的諸事件について歯に衣を着せぬ発言で物議を醸したことのある人物のようである。

「金益烈のミステリー」の主旨は、遺稿録「四・三の真実」が金益烈の弁明と嘘に満ちていて、4・3事件の真相を歪曲し、左傾的な理解に導く役割を果たしているというものである。遺稿録の信憑性を否定する際に寄稿文の存在を重要な文書として利用している。ブログの発表時期を考えると池萬元氏も金ヨン Chol論文で寄稿文の存在を知った可能性があるが、ブログで金ヨン Chol論文についての言及はない。

池萬元氏は、金益烈が容共的人物だとの疑いをかけて議論しているが、その最大の根拠として挙げているのは、金益烈が金達三と同窓生であったという指摘である。また第9連隊内に部下として南労党員（代表的な

⁶⁶ この部分は、金ヨン Chol論文を通してわたしなりに理解した彼の主張の要点である。

⁶⁷ 第1回目のURLは、以下の通りであり、ここから各回のブログに順次アクセス可能である。<http://blog.naver.com/jmw8282?Redirect=Log&logNo=140126286453>

のは、金益烈後任の朴珍景を殺害した文相吉)を抱えていたことも論拠としている。

金益烈と金達三が同窓生の間柄だとする話は、張昌国の著書『陸士卒業生』(中央日報社、1984年)という本の中で、二人が福知山陸軍士官学校の同窓であったと言及されて知られるようになったとのことである。これについては、済民日報四・三取材班『済州島四・三事件 第二巻四・三蜂起から単独選挙まで』でもそういう噂があったことについて検討しているが、それが事実かどうかは確認できなかったとだけ記している⁶⁸。しかし、池萬元氏はブログの読者から金益烈と金達三が同窓生の関係にあったという情報提供を受けたことを書いている。ブログの読者は、金益烈と友人関係にあったある人物から、金益烈自身が金達三と同窓生であったと、その友人に語ったことがあることを聞き及び、その内容をA4一枚の証言録として作成し、その人物から証拠としてサインを得ていたというのである。池萬元氏はそのサインされたA4一枚の文書を見せてもらったというのである⁶⁹。

さらに金益烈が武装隊と通じていたという指摘もしている。その論拠になっているのが、すでに紹介した『済州島人民遊撃隊闘争報告書』である。このなかに「4月中旬頃、文少尉(文允洛のことか一倉持)から99式銃4丁、呉一均大隊長(のちに麗水・順天反乱事件に関連して処刑された一倉持)からカービン銃弾丸1,600発、金益烈連隊長からカービン弾丸15発、それぞれ供給を受けた」⁷⁰との記録がある。これまで金益烈の証言は、武装隊と対立し、これを討伐する側の見解ということで武装隊の立場とは一線を画したものと受けとめられてきた。しかし、もし『済州島人民遊撃隊闘争報告書』の記述が事実であれば、金益烈は武装

⁶⁸ 済民日報四・三取材班(1995)、112~113ページ。

⁶⁹ 金萬元のブログ「金益烈のミステリー(4)乱闘劇の秘密」<http://blog.naver.com/PostView.nhn?blogId=jmw8282&logNo=140126425146&parentCategoryNo=3&c>を参照。

⁷⁰ 文昌松編(1995)、80ページ。

隊に武器を提供するほどに武装隊と親密な関係にあったということになる。そうだとすれば、この点でも金益烈の証言を改めて再検討しなければならないだろう。しかし、その前提として『濟州島人民遊撃隊闘争報告書』の信憑性についても十分な検証が必要だと思われる。

池萬元氏の意図は、4・3委員会の真相究明に反発して、4・3が共産主義者の陰謀による反乱・暴動であり、それゆえ討伐作戦は正当なものなどの旧来の見解を改めて主張しようとするところにあるようである。しかし4・3委員会によってこれまでに明らかにされた討伐過程で無辜の人々が多数、殺害されたことまでは正当化できないであろう。そういう意味で、池萬元氏の主張に安易に与することはできないが、事実関係については、諸資料にもとづいて一層の検証が必要である。

5 失われた村：東広里ムダウンイワ、細花里タランシ、禾北里コヌル洞

さて平和会談が金益烈の証言どおりに交渉合意に至ったのか、あるいは合意に至らなかったのか、前節で述べたように黑白付けるのは難しい。しかし、それがどうであれ、結局はその後も武装隊と討伐隊の間の武力衝突が継続した。平和的解決を主張した金益烈は5月6日、電撃的に更迭され、第9連隊長は朴珍景に交替した。同時に水原から第11連隊が増援され、警備隊の兵力は増強された。朴珍景は、金益烈と違って強硬な討伐作戦を展開していく。それは何としても5・10選挙を成功裏に終わらせたいという米軍政の意図に従うものであった。しかし、濟州島における5・10選挙は、3カ所の選挙区のうち2カ所で不成立となった。濟州島は全選挙区のなかで選挙が成立しなかった唯一の地域となったのである⁷¹。このことは、ある意味で武装隊の勝利を意味した。事実、すでに紹介したが、金達三は、海州で開催された北朝鮮の人民代表者会議でこの戦果を誇ったのである。しかし、それは濟州島が「アカの島」である

⁷¹ 以上の時期の状況について、詳しくは、前掲、済民日報四・三取材班（1995）、170～210ページを参照されたい。

という見方をますます強めることになったともいえる。

面子をつぶされた米軍政は、1ヶ月後の6月10日の再選挙を目指して、討伐作戦を強化するが、結局、再選挙も実施できなかった。この間、5月20日、募瑟浦第9連隊の警備隊兵士41名が脱営して武装隊に合流するという事件が起こった。朴珍景連隊長の強硬策に反発した済州島出身の兵士たちが大部分であった。しかし、これはさらに討伐作戦を強化する結果となった。そんななかで6月18日には、朴珍景連隊長が部下の将兵に殺害されるという衝撃的な事件も起こった⁷²。

38度線以南で行われた単独選挙は、済州島を除けば、はじめての普通選挙として成功裏に行われた。その結果、選出された議員により制憲議会が構成され、8月15日、李承晩を初代大統領に選出して大韓民国が樹立された。建国後の韓国政府にとって、済州島における武装隊の存在は目の上のたんこぶであった。中央政府からはるかに遠い離島ではあったが、大韓民国の存立を揺るがす存在であった。新政府はこれを許すわけにはいかなかった。こうして建国後、さらに徹底した討伐作戦を展開していくことになった。それが、この時期に連隊長となった宋堯讃によって遂行された焦土化作戦である。1948年10月17日、以下の布告文が宋堯讃によって発表された。

軍は、漢拏山一帯に潜伏し天人共怒たる蛮行を敢行している売国激烈分子を掃討するため、10月20日以後、軍の行動終了まで、全島の海岸線から5キロメートル以外の地点、及び山岳地帯の無許可通行禁止を布告する。この布告に違反したものは、その理由の如何を問わず、暴徒とみなし銃殺する⁷³。

この布告が出された直後の10月19日、済州島鎮圧のために派兵を要請された麗水駐屯第14連隊の一部兵力がこれを拒否して反乱を起こし、一

⁷² この時期の詳細については、済民日報四・三取材班（1996）を参照されたい。

⁷³ 済民日報四・三取材班（1998）、43～45ページ。なお宋堯讃は、朴正熙の5・16軍事クーデター後、国防長官や首相を歴任した。

時は彼らが麗水・順天一帯を占拠するという事件（麗水・順天反乱連事件）が起こったのである⁷⁴。この事件により、肅軍の嵐が吹き荒れると共に、共産主義に対する警戒が一層強まった。国家保安法が制定されるのもこの事件が契機となった。国家保安法は、その後、共産主義者はじめ政權を批判する人々を弾圧する法的根拠となったのである。麗水・順天反乱事件は、濟州島における武装隊の徹底弾圧という逆効果を生んだと考えられる。

以後、濟州島では、従来の警察、右翼青年団に加え、警備隊から正式に軍隊となった国軍が主導して、中山間地域で無差別の焦土化作戦を展開していくのである。こうして中山間地域の村々は討伐隊によって焼き尽くされ、それによって犠牲者も急増することになった。

ここで4・3事件の犠牲者の時期別推移を第3表から見てみよう。これは第1表と同じ出所で、4・3委員会による2000～2007年の審査結果に基づいて犠牲者として認定された数である。だから実際の犠牲者の数とは違う。実際数は、恐らくこの2倍から2.5倍になると考えられるが、時期別推移の全体的傾向を知ることが可能であろうと思われる。

第3表をながめてすぐに気づくのは、1948年10月～1949年3月の期間に犠牲者が集中していることである。この半年で犠牲者数は、全期間の3分の2に達している。この時期こそ、まさに焦土化作戦が展開された時期なのである。布告文で布告された通りに、中山間地帯にいたという理由だけで、「暴徒」とみなされ、無辜の住民が殺害される事件がこの時期に頻発したのである。布告令によって中山間地帯は、住民が生活できない場所となった。中山間地帯の人々はやむなく海岸地域に疎開したり、山奥に入って討伐隊から身を隠したりするほかなくなった。一部には武装隊に身を投ずる者もいたであろうが、大多数はひたすら、討伐隊から逃れて山のなかをさ迷ったのである。

この結果、中山間地帯の村のなかに、4・3事件収拾後も村人が戻らず、

⁷⁴ 徐仲錫 (2008)、28ページ。

再建できない村が多数生じた。これが「失われた村」と呼ばれる村である。

第3表 4・3事件の犠牲者数の時期別推移

		人数	%
時期別	47.3-12	17	0.1
	48.1-3	24	0.2
	48.4-6	542	4.0
	48.7-9	213	1.6
	48.10-12	5,349	39.4
	49.1-3	3,705	27.3
	49.4-6	329	2.4
	49.7-9	201	1.5
	49.10-12	423	3.1
	50.1-3	100	0.7
	50.4-6	613	4.5
	50.7-9	1,523	11.2
	50.10-12	62	0.5
	51～	234	1.7
	未詳	229	1.7
	計	13,564	100.0

出所：濟州島四・三事件を考える会編『濟州島四・三事件 記憶と真実』（新幹社、2010年）
注：4・3委員会による2000～2007年の審査の結果の数字である。

「失われた村」について、わたしは、今回、海外FWに訪問することがきっかけではじめて知ることになった。金昌厚所長がアレンジしてくれた旅程表のなかに、3カ所、「失われた村」と記された訪問場所が記されていたことによってである。はじめて知ったというのは正確ではない。準備過程で学生たちと共に読んだ2冊の本の中に「失われた村」に言及した部分があった。といっても2つの本で指摘があったのは、東広

里ムドンイワについてだけである⁷⁵。しかもごく簡単な言及であった。そういうこともあって、「失われた村」について関心を払わないままでいたのである。

「失われた街」という言葉を東日本大震災後、耳にするようになった。東北・関東地方の太平洋側沿岸の多くの街が大津波に呑み込まれ破壊されてしまったのである。このことを目の当たりにして、わたしたちは自然の破壊力の恐ろしさを再認識した⁷⁶。これらの街はいまだなかなか復興が進んでいないようである。しかし、いずれは復興していくことだろう。濟州島の失われた村は、自然災害で失われたわけではない。人為的に消滅させられたのである。それから、すでに60年近くが経ったのだが、いまだに再建されていない村なのである。

文京洙教授が著書で東広里ムドンイワのことを言及した部分で、同じように失われた村は濟州島全体で84カ所にのぼると述べている⁷⁷。この数値は、4・3特別法により設置された濟州四・三事件実務委員会が2001～2002年にかけて実施した調査結果にもとづくものである。しかし、今回、入手した『濟州島4・3 失われた村』（濟州4・3平和財団、2010年）という写真集の末尾に失われた村の現況という表が示されているが、それによると総数は108カ所と示されている。数値は、自然部落を単位として数えているようで、現況の表を見ていくと10戸未満といった村も多数見られる。前者のいう84カ所と基準が違うのかも知れない。

⁷⁵ 前掲、文京洙（2008）の134～135ページおよび前掲、許榮善（2006）の123～124ページでごく簡単に言及している。

⁷⁶ 海外FW 出発前の8月30日、ヨコハマ創造都市センターで開催された「失われた街 3.11のための模型復元プロジェクト展」を見学する機会があった。津波で失われた街を1/500のスケールの模型で再現するという企画展である。模型の横には、その模型の地の震災前と震災後の衛星写真が展示されていた。改めて津波の被害の大きさを再認識した。本学の鈴木伸治ゼミの学生たちが参加したこの企画は、模型によって震災前の姿を再現することで、未だ復興を見ていない被災地を激励しようという思いが込められていた。

⁷⁷ 前掲、文京洙（2008）、135ページ。

金昌厚所長が選んで、私たちが訪問した3カ所の失われた村の概要を示せば第4表のとおりである。この3つの村は、いくつかの点で失われた村を代表しうる特徴を持っている。

第4表 訪問した3カ所の失われた村の概要

村の名前	概要
東広里ムドンイワ	1948年11月21日、村がすべて焼かれ、復旧できなかった村である。当時、130余戸の住民たちが住んでいた。
細花里タランシ	1948年11月頃、疎開した後、復旧できなかった村である。当時、10余戸の住民が住んでいた。
禾北里コヌル洞 (コヌルドン)	1949年1月4日、軍人たちによって焦土化され、現在まで復旧できなかった失われた村である。当時の戸数は約70戸程度である。

出所：『済州島4・3 失われた村』（済州4・3平和財団、2010年）

まず東広里ムドンイワは、失われた村のなかで最大規模だという点で、失われた村のなかでもっとも有名なところである。文京洙教授が著書で紹介したのもこのためだと思う。事前学習会で、『悲劇の島チェジュ（済州）～「4・3事件」在日コリアンの記憶』（2008年4月27日、NHK教育テレビで放映）というドキュメンタリーを学生たちと見たが、このなかにも東広里ムドンイワが紹介されて出てきた。写真集『済州島4・3 失われた村』は、東広里ムドンイワについて、「ムドンイワは現在、済州島の失われた村のうちその規模がもっとも大きい村である。ムドンイワはいまも村の跡が比較的良好に残っている。4・3を学ぼうとする巡礼者たちが必ず訪れるところで、竹藪、エノキ、住居跡、石垣をながめて4・3を考え、平和と人権の価値をかみしめる貴重な場所である。」⁷⁸と解説文で述べている。

つぎに細花里タランシだが、ここは東広里ムドンイワとは対照的に

⁷⁸ 済州4・3平和財団（2010）、95ページ。

村としては非常に小さいところである。しかも、ここは東広里ムドンイワとは違い、討伐隊による犠牲者はなかった。焦土化される前に村人が自ら疎開していたからである。しかし、この村も結局、再建されなかった村である。タランシが有名であるのは、1992年4月、この近くの地下窟（タランシ窟と呼ばれることになった）で女性、子どもを含む11人の遺体（タランシの村人ではない）が発見されたからである。4・3事件後40年以上経た遺骨発見の報道は4・3事件に対する関心呼び、その後の真相究明に弾みを付けるきっかけになった。その意味で重要な場所なのである。

三番目の禾北里コヌル洞は、村の規模では前二者の中間になる。この特徴は、中山間部の村ではないのに焦土化された村だということである。ここは海に面した村である。にもかかわらず村は完全に焼き尽くされてしまった。焦土化された海岸の村は数少ないが、海岸の村で再建されないままなのはコヌル洞だけである。もう一つ、ここが失われた村として注目されるのは、村の跡、住居跡がもっとも鮮明に残っているという点である。

さて、以下に3カ所の失われた村について、訪問時の印象も含めてもう少し詳しく見ていくことにしよう。（別稿につづく）

参考文献

【日本語文献】（日本語読みで50音順）

許榮善（2006）『濟州四・三<日本語版>』、民主化運動記念事業会、2006年

金石範・金時鐘（2001）『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか 濟州島四・三事件の記憶と文学』、平凡社、2001年

金東椿（2008）『朝鮮戦争の社会史 避難・占領・虐殺』、平凡社、2008年

倉持和雄（2007）「韓国キリスト教の歴史と特質についての考察」、『横

- 横浜市立大学論叢・人文科学系列』第58巻第1・2号、2007年3月
- 玄基榮 (2001) 『順伊おばさん』(金石範訳)、新幹社、2001年
- 玄基榮 (2002) 『地上に匙ひとつ』、平凡社、2002年
- 済民日報 四・三取材班 (1994) 『済州島四・三事件 第1巻・朝鮮解放から四・三前夜まで』、新幹社、1994年
- 済民日報 四・三取材班 (1995) 『済州島四・三事件 第2巻・四・三蜂起から単独選挙まで』、新幹社、1995年
- 済民日報四・三取材班 (1996) 『済州島四・三事件 第3巻・流血惨事への前哨戦』、新幹社、1996年
- 済民日報四・三取材班 (1998) 『済州島四・三事件 第4巻・焦土化作戦(上)』、新幹社、1998年
- 済民日報四・三取材班 (2000) 『済州島四・三事件 第5巻・焦土化作戦(下)』、新幹社、2000年
- 済州島四・三事件を考える会・東京編 (2010) 『済州島四・三事件 記憶と真実』、新幹社、2010年
- 徐仲錫 (2008) 『韓国現代史60年』、明石書店、2008年
- 文京洙 (2005a) 『韓国現代史』、岩波書店、2005年
- 文京洙 (2005b) 『済州島現代史 公共圏の死滅と再生』、新幹社、2005年
- 文京洙 (2008) 『済州島四・三事件 「島のくに」の死と再生の物語』、平凡社、2008年

【韓国語文献】(日本語読みで50音順)

- 金ヨンチョル (2009) 『済州4・3事件初期警備隊と武装隊交渉研究』、済州大学校大学院史学科修士論文、2009年
- 金ピョンソン (2010) 「西北青年団の暴力動機分析—済州4・3事件を中心として」、『4・3と歴史』第9・10合併号、済州4・3研究所、2010年
- 金昌厚 (2011) 「4・3真相糾明運動50年史に見る4・3の真実」、『4・3と歴史』

第11号、濟州4・3研究所、2011年

濟州4・3研究所 (2005) 「第12回歴史教室 濟州4・3の歴史的眞實を求めて」、濟州4・3研究所、2005年11月

濟州4・3研究所 (2008) 『4・3犠牲者遺骸発掘写真資料集』、濟州島特別自治道、2008年

濟州4・3研究所 (2011a) 『4・3の道を歩く 濟州4・3遺跡143選』、4・3平和財団、2011年

濟州4・3研究所 (2011b) 『4・3犠牲者遺骸発掘写真資料集2 ジョントゥル飛行場発掘1次』、濟州島特別自治道、2011年

濟州4・3研究所 (2011c) 『4・3虐殺闇埋葬地 (南元邑泰興里) 遺骸発掘事業 最終報告書』、濟州4・3研究所、2011年

濟州島4・3研究所／金昌厚 (2010) 『対馬に漂流した4・3の魂』、図書出版カク、2010年

濟州4・3事件眞相糾明および犠牲者名誉回復委員会 (2003) 『濟州4・3事件眞相報告書』、2003年

濟州4・3第50周年学術・文化事業推進委員会編 (1998) 『濟州4・3遺跡地紀行 失われた村を訪ねて』、学民社、1998年

濟州4・3平和財団 (2010) 『濟州島4・3 失われた村』、濟州4・3平和財団、2010年

濟州平和財団 (2012) 『4・3と平和』 第9巻、2012年9月

百祖一孫遺族会 (2010) 『百祖一孫英霊60年史 ソダルオルムの恨』、百祖一孫遺族会、2010年

ヤン・ボンチョル (2010) 「濟州4・3と西北キリスト教」、『4・3と歴史』 第9・10合併号、濟州4・3研究所、2010年

【ウェブサイト資料 (韓国語)】

オ・スングク (2007) 「4・3遺跡地を訪ねて (5) 城山里西北青年団駐屯地」 (<http://blog.naver.com/yklee43?Redirect=Log&logNo=30037845130>)

金チャンチブ (2007) 「第14回4・3文学紀行 (3)」

(<http://blog.daum.net/jib17/10075118>)

池萬元 (2011) 「金益烈のミステリー」

(<http://blog.naver.com/jmw8282?Redirect=Log&logNo=140126286453>)

文昌松編 (1995) 『漢拏山は知っている 埋もれた4・3の真相』、1995年

(http://jeju.ex-police.or.kr/resource1_14.php)